View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

淑徳大学総合福祉学部研究紀要　42　115－131，2008

専門職アイデンティティを生み出す授業プログラム

仲　本　美　央

Ⅰ　はじめに

現在，大学という高等教育機関における教育は，急激な社会変化に伴い，多様な教育ニーズへの対応が課題である。文部科学省が推進する「国公私大学を通じた大学教育改革の支援の充実」では，国際競争力世界最高水準の教育研究拠点の形成や社会の要請に応える専門職業人養成の推進，現代的課題に対応できる人材養成と大学の多様な機能の展開，課程に応じた教育内容・方法等の高度化・豊富化等の充実を課題とし，大学では「世界的研究・教育拠点」「高度専門業人養成」「幅広い職業人養成」「総合的教養教育」「特定の専門的分野の教育・研究」「地域の生涯学習機会の拠点」「社会貢献機能」等の多様な機能が求められている。これらの課題や機能からわかるように，これまでに重視されてきた教育・研究機関としての役割と共に，“ 専門職人養成 ” と “ 教養教育の充実 ”, “ 地域社会における機能の充実 ” の役割に重点が置かれている。特に，“ 専門職人養成 ” の課題については，近年学生における資格取得の重要志向によって入学してきた学生に，四年間の教育期間でどのような教育を展開し，専門職への深い理解と知識を培い，現場での良い実践力として育成していくかに大きな課題が課せられているのである。

どのような分野の専門職を目指す学生にとっても，自らの専門職としてのIdentity（アイデンティティ：自己意識）を確立し認識を深めることは，大学生活において重要な課題の１つであると考える。藤縄ら（2004）[1)] は，福祉系大学学生の専門職アイデンティティに関する調査研究を行い，一般的に１学年で評定が高く２，３学年で低下し，４学年でまた高くなるという結果を報告し，１学年で評定が高いのは専門職アイデンティティが確立しているからではなく，専門職の勉強に対する希望や期待の現れであり，４学年で２学年や３学年に比べて上昇したのは，実習を通じて専門職アイデンティティが徐々に確立しつつあるからと考察している。

筆者自らも福祉系大学での教授経験において，藤縄ら（2004）の調査研究結果同様に学生のこの意識変化に大きな課題を持ってきた。特に，１学年において多くの学生がもつ「専門

職の勉強に対する希望や期待」をいかに，２，３年生へと繋げ，意識と行動を育むことができるかを検討してきた。仲本（2005）[2] では，ユニバーサルデザインをテーマとして障害者福祉への意識を深めた授業実践を行い，報告した。この実践では，学生の意識や行動の変化を導き出した。しかし，この取り組みでの課題として残されたのは１年間を通して実践されたことをどのように２，３学年へと繋げるかということを導き出せなかった点にある。

そこで，本稿では，大学生が点訳絵本の製作とその他諸活動を通して，**①“専門職人養成”のスタートとなる学生各自の専門職としてのIdentity（アイデンティティ：自己意識）を深めた意識・行動変化，**さらには，この一連の活動が，**②“地域社会における機能の充実”へと発展する可能性**を報告することと共に，専門職Identity（アイデンティティ：自己意識）を育む教育方法のあり方を検討していく。

Ⅱ　授業プログラム

(1) 意　義

藤原（2002）[3] は，介護福祉専攻の学生にみる志望動機とその背景について，福祉系の大学への進学を決めるきっかけとして，高等学校にて福祉関連授業が設定されていることや中学生の段階での将来の職業を想定した職業体験がなされていること等が影響していると指摘している。また，この研究調査結果から，中高学生での福祉やボランティア活動に関する学習プログラムが活発化される中で，これらの経験から福祉専門職を目指し，大学進学をしている学生の姿を明らかにしている。上述した通り，藤縄ら（2004）は，福祉系大学学生の専門職アイデンティティに関する調査研究では，１学年で評定が高く，２，３学年で低下し，４学年でまた高くなるという結果を報告し，１学年で評定が高いのは専門職アイデンティティが確立しているからではなく，専門職の勉強に対する希望や期待の現れであり，４学年で２学年や３学年に比べて上昇したのは，実習を通じて専門職アイデンティティが徐々に確立しつつあるからと考察している。このように，志望動機となる中高校生での経験から１学年で持続される「専門職の勉強に対する希望や期待の現れ」をいかに２，３学年へ繋げて授業展開を行うかが大きな課題となっている。筆者は，これまでの福祉系大学において授業展開をしてきた中で，１学年においても中高校生の時に経験してきたような福祉社会における当事者（福祉の対象者）の見える授業プログラムが必要であると考え，下記に示す「実施期間」「実施対象」「展開内容」にて，授業を実施し，専門職アイデンティティの育むことを試みた。

(2) 実施期間

2006年７月～2007年１月。

(3) 実施対象

S大学社会福祉学部において「児童福祉論」を受講している学生199名。

※「児童福祉論」の受講者は，社会福祉士を目指す１学年の学生が主な対象である。

(4) 展開内容

下記の表１が具体的な展開内容である。

表１　授業プログラムの展開内容

年月日	活動内容
2006年７月７日（金）	・「点訳絵本」についての説明，「点訳絵本の作り方」ビデオ視聴。
2006年７月14日（金），21日（金），25日（火）	・点字の書き方の説明と実践（基礎点字講習）。点訳絵本の作り方講習。
夏季休業中	・「点訳絵本」の製作，「点訳絵本」の作成過程に関するレポート作成
2006年９月18日（金）	・「点訳絵本」の提出。
2006年９月25日（金）	・「点訳絵本」の作成過程に関するレポート提出。
2006年10月上旬	・図書館にて，全グループの点訳絵本とポスターの展示。
2006年10月16日（月）	・学内図書館内にて，「点訳絵本」展の開催。
2007年１月以降	・「点訳絵本」の地域住民への貸し出し。

本プログラムでは，「点訳絵本」の製作活動を通して，以下の５つについて学習することを目的とした。

①視覚障害者（福祉の対象者）への理解を深めること
②点訳絵本への知識を深めること
③点字の書き方を身につけること
④地域の中で障害を持つ養育者またはその子どものそれぞれにとってのより良い子育ち環境のあり方に理解を深めること
⑤専門職アイデンティティを育むこと

Ⅲ　点訳絵本とは

一般に市販されている絵本の文章を塩化ビニール製の透明なシートに点訳し，原本の活字部分に貼り付けたり（図１），同じシートで絵を形づくって貼りこんだり（図２），説明文を書き添えたりして作成した絵本である。見える人と見えない人が一緒に楽しめるように工夫されている。この点訳絵本の創始者は，岩田美津子氏（岩田氏は全盲の方である）で，1984年に「岩田文庫」として自宅に開設し，1987年に「点訳絵本」の郵送料無料化が決定，1991

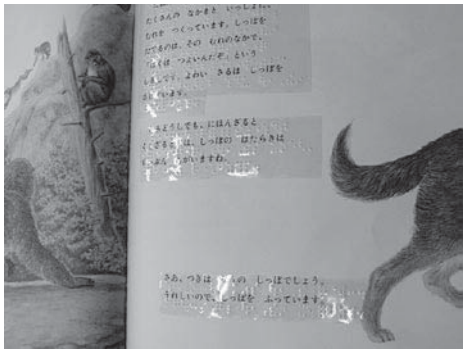

図１　透明なシートに点訳し，貼付している様子

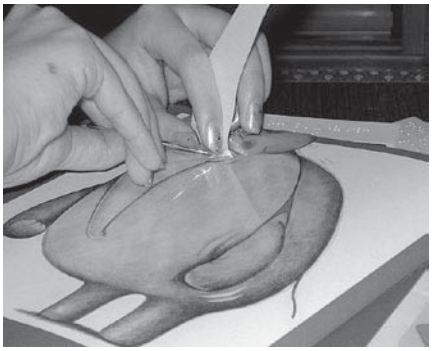

図２　絵を形づくり貼りこんでいる様子

年に社会福祉法人視覚障害者文化振興協会の一事業に加えられ名称を「ふれあい文庫」と改称。その蔵書数は5,000冊を超え年間約6,000冊の貸出を行うようになり，現在100名を超えるボランティアがこの活動を支えている。岩田氏は，子育て中に自らが視覚に障害を持っていることで絵本の読み聞かせることができず，どうにか実現することができないかと考え，友人の協力のもと試行錯誤を重ねて「点訳絵本」を作成した。このことがきっかけとなり，現在では全国の視覚に障害を持つ養育者のもとへ，点訳絵本を貸出するまでの活動を展開させている。「点訳絵本」作成の授業を展開するにあたり，筆者は「ふれあい文庫」の活動を見学・調査し，授業過程においては，岩田氏をはじめ関係者の方々に多くのご協力・ご助言を頂いた。

Ⅳ　授業プログラムの実施

（1）点訳絵本の説明

点訳絵本については，2005年10月15日にNHKにて放映された番組きらっといきる第261回「広がれ点訳絵本の輪　～岩田美津子さん～」を視聴覚教材として使用し，事前に見学・調査した「ふれあい文庫」の活動状況等も含めて説明。

（2）点訳絵本の作り方

点訳絵本の作り方（DVD）を視聴し，説明。

（3）点字の書き方講習

日本点字図書館発行の『点字のしおり』をテキストにして，点字の書き方の基本講習を合計６時間行い，自宅での自己学習も加え，点字の書き方を指導。

(4) 点訳絵本の製作

平均５～６人のグループを構成し，夏季休業中の課題にて点訳絵本の制作活動を行う。製作活動の過程では，グループ毎に活動を記録（写真や活動経過，活動に伴うグループ構成メンバーの考えをまとめる等）するように指導。

(5) 点訳絵本とレポートの提出

夏季休業明けの講義にて，製作した点訳絵本と活動記録レポートの提出。

(6)「点訳絵本」展の開催

S大学附属図書館と連携し，同図書館内にて「点訳絵本」展を開催した。展示会を開催するにあたり，各グループによって作成された全36冊の「点訳絵本」が提出された後，10月上旬の約２週間において，各グループの代表者24名及び図書委員が集まり，展示会に伴うポスターの内容検討・作成，展示配置の計画等を行った。展示品には，学生の作成した「点訳絵本」の他に，ふれあい文庫から借用した「点訳絵本」・郵送袋やその他バリアフリー絵本（点字絵本，さわる絵本，布絵本，しかけ絵本等），関連文献等が展示された。ポスターは８つの内容が紹介され，グループ毎に提出されたレポートやふれあい文庫のHPを基に作成された。図３・４・５は展示会の様子である。

図３　展示会の様子Ⅰ

図４　展示会の様子Ⅱ

図５　展示会の様子Ⅲ

(7) 点訳絵本の貸出

「点訳絵本」展終了後，S大学附属図書館を通じて，地域の視覚障害を持つ養育者への貸出を開始。

Ⅴ　学生の意識・行動変化

(1) 授業プログラム後のアンケートから

授業プログラム終了後，取り組みを行った学生に以下６項目にて自由記述のアンケートを行い，その内容結果からプログラムごとの感想と共に学生の意識・行動の変化が明らかにし

た。各項目の詳細は，以下の通りである。尚，アンケート内容を抽出するにあたり，同様の内容と考えられる複数の内容が出現した場合は，代表的な内容を各一文ずつ明記することとした。

①　点字の事前講習について

表２　点字の事前講習について

	アンケートの内容
講習内容について	・もう少し時間をかけて教えて欲しいと感じた。 ・丁寧に教えていただいたので，わかりやすかった。 ・大変だった。 ・難しかったけど，面白かった。
意識や行動の広がり	・街で見かけると，少し読めるようになっていて，とてもためになりました。 ・点字というものはどういったものなのか普段学べないことをこの福祉という大学で触れたことが新鮮な気持ちでした。 ・点字の役割，必要性等色々詳しく理解できた。 ・初めて点字器を触って，こんな小さな器具で点字が打てることにびっくりした。 ・点字のおかげで読める人もいるので，私も覚えたいという気持ちになった。 ・実際に点字をやってみて大変な作業でしたが，視覚障害者に伝えることは大事だと思った。

表２に示されるとおり，その内容の多くが**講習内容について**の感想であった。ほとんどの学生が初めて経験することであっただけに，点字の技術を習得するには講習時間が不十分であったとの意見が多数あげられた。この点に関しては，今後，本プログラムを行うにあたっては，改善が必要であると考える。また，このような感想と共に，点字そのものの経験から**当事者の立場や福祉社会にとって必要なことへの意識や行動の広がり**が現れている。点字という専門職として必要な福祉的な知識・経験だけではなく，意識や行動の広がりが出現していることが明らかになった。

②　点訳絵本の作成について

表３　点訳絵本の作成について

	アンケートの内容
仲間や個人での達成経験	・今回の授業により，初めて知ることができ，また仲間と共に一つのことを成し遂げたことにも達成感が得られ，良かったです。 ・悩んだり，迷ったりすることもたくさんあったけど，納得のいく点訳絵本ができて良かったです。
点訳に伴う作業技術について	・絵に対しても点字を付けるということで，絵に対しての表現が難しいところがありました。 ・大変だった。 ・最初は楽に作成できると思っていたけど，実際作業に取り組んでみたら，難しかった。 ・根気のいる作業だった。 ・グループ全員で集まるのが夏季休業中は，なかなか難しく大変だった。 ・シートを貼り付けた後で修正できないので，慎重に作業を進めていき，時間がかかった。 ・一度間違えた時のショックは大きく，完成が近くなるにつれて，失敗する度泣きそうになった。 ・いざ（作業を）始めてみると疑問がいくつも浮上した。
意識や行動の広がり	・少しでも読みやすいように等，読み手のことを想像しながら作れたので，今まで遠い存在だった点字に対するイメージも変わった気がします。 ・どうすれば視覚障害の方にわかりやすい絵本にすることができるのか考えてやることはとてもやり甲斐があった。 ・どこまで絵を表現するべきか悩みました。…実際に伝わるのか今でもわかりません。 ・視覚に障害がある方にとってのメディアについても考える機会ともなり，良い経験になったと思います。 ・障害者の立場にたって考えて目を閉じて実際に触ってみたら，絵の形があまり分からなく大変でした。 ・点字というものの知識・体験がぐっと身近な存在となり，とても貴重な体験ができました。 ・入学して初めて【福祉】らしいことをして，良い機会だった。

表３に示されるとおり，その内容の多くが**点訳に伴う作業技術について**の感想であった。また，このような感想と共に，**仲間や個人での達成経験**についての感想やここでも点訳絵本作成の経験から当事者の立場や福祉社会にとって必要なことへの**意識や行動の広がり**が現れている。点訳技術という専門職として必要な福祉的な知識・経験だけではなく，意識や行動の広がりが出現していることが明らかになった。

③　点訳絵本という活動・普及について

表４　点訳絵本という活動・普及について

	アンケートの内容
点訳絵本活動の広がりへの期待	・もっと広がると良いと思う。 ・目の見えない親やその子どもでも，共通に楽しめることがあるのは，とてもいいことだと思います。 ・一般の図書館等にも置いてあるようになればよいと思います。 ・視覚障害者にとって行きづらかった図書館・本屋等に点訳絵本コーナーを設置することで，その方々の楽しみの場所になり，外出することも多くなり，そして心の視野が広がると思います。
意識や行動の広がり	・多くの人に体験して欲しいと思います。絶対に心の中で何かが変わると思います。実際に自分が体験していて，点字に対しての考え方も変わり，点訳していて，とても温かい気持ちになりました。 ・いろんな人に点訳絵本について知ってもらい，そこから福祉的なものの感じ方や考え方を知って，福祉をもっと身近に感じてくれる人が増えたらいいなと思いました。 ・本学でもボランティアを募集し，活動を続けていければ良いと思う。 ・福祉大学だから，こういう活動はどんどんした方がいいと思う。 ・もっと活動をして，大学以外でも展示できるようにすると良いと思う。 ・少しの知識とやる気があれば，誰でもできるんだなと思いました。 なので，点訳絵本の講習が身近で受けられたら参加する人も増えるんじゃないかと思いました。 ・点訳絵本を利用している知人に話を聞いてみたことがあるのですが，本当にありがたいと言っていました。息子に絵本を読んであげられることを今は楽しんでいるようです。より点訳絵本が普及してくれればと思います。 ・自身は読まないではなく，色々な人が読んでいるという考え方をみんなが持てば早く普及すると思う。 ・視覚障害者はもちろん，健常者も目が見えない人の気持ちになってもらいたいので，これからもっと普及して欲しい。 ・今まで知り合いからしか聞いたことがなく，実際に体験してみて，目の不自由な方の大変さが少々ながらわかった気がする。 ・必要な人に必要な物が届くシステムを確立する事には，大きなエネルギーを感じます。何事にも人的ネットワークの大切さを思います。

表４に示されるとおり，点訳絵本の普及に対して，さらなる**点訳絵本活動の広がりへの期待**が多く述べられていた。また，このような感想と共に，ここでも点訳絵本の活動・普及に対する考えにとどまらず，当事者の立場や福祉社会にとって必要なことへの**意識や行動の広がり**が現れている。「点訳絵本を利用している知人に話を聞いてみたことがあるのですが，本当にありがたいと言っていました。息子に絵本を読んであげられることを今は楽しんでい

るようです。より点訳絵本が普及してくれればと思います。」等の内容からみられるように，当事者の立場で物事をとらえるのみならず，実際に当事者と触れ合い，交流を持つことで，より意識の深まりが現れていることが明らかとなった。

④　岩田美津子さん・ふれあい文庫について

表５　岩田美津子さん・ふれあい文庫について

	アンケートの内容
点訳絵本について	・（展示されたふれあい文庫作成の点訳絵本を読んで）プロのレベルを知った。 ・絵の立体感や想像が我々の物の比ではない。 ・図書館に置いてある点訳絵本を見て，すごく丁寧に作っているんだなと思いました。触っていて，そんなに引っかかる所はないし，とても分かりやすい位置にあって，使う人のことを考えて作っていらっしゃるんだなと感じました。 ・絵本は親子で楽しめるものです。視覚障害を持つ親だからといって，親子で楽しむことができないということではないので点訳絵本は素晴らしいと思います。 ・このまま点訳絵本が世界中に広がればいいなと思った。 ・いずれ書店で売れるようになって欲しい。
ふれあい文庫の活動について	・親子で楽しく絵本を読みたいと思う気持ちを大切にされたからこそ，その輪が広がっていったのだと思いました。 ・ふれあい文庫について，もつと詳しく知りたいと思いました。 ・大変な活動だと思う。けれども，それによって助かっている方は沢山いると思うので，これからもがんばってもらいたいと思う。 ・健常者の人，視覚障害者の人，誰もが来館しているこの文庫は，ふれあい文庫の名のように，「ふれあい」というものがあり，とても素晴らしいものだと感じました。 ・ボランティアで活動している人はすばらしいなと思いました。 ・ふれあい文庫に行ってみたいと思う。 ・（この活動は）視覚障害者の人たちの子育てに希望や喜びを与えている。 ・借りる方の注文に合わせて，送っているのは素晴らしい。
岩田美津子さんについて	・岩田美津子さんの生き方に憧れました。 ・「あったらいいな」を実現させてしまうパワーがすごいと思いました。現状を受け入れるだけでなく，自ら切り拓いていく大切さを教えていただきました。 ・こんな素晴らしい活動を始め，続けている岩田さんに会ってみたいと思いました。 ・岩田美津子さんのような点訳絵本の創始者がいなかったら，視覚障害者はもちろん，その方々の家族にも（絵本の読み聞かせに関しては）障害を持っているからという暗く閉ざされたものになっていたかもしれません。

	アンケートの内容
岩田美津子さんについて	・自ら望むこと，すべきこと，やりたいこと，これらを自覚していても実際に行動できる人はそうはいない。その点で，とても尊敬できる人（人達）だと思う。 ・点訳絵本の普及のために，郵送料を無料にする活動を行ったり，手製の布袋を作ったりとすごい人だなと思いました。 ・何より個人の活動からこのようにしっかりと作成のルールを明確にして下さったのが，有難く感じます。 ・岩田さんが視覚障害者だからこそ出たこのアイデアは，他の障害を持った方にとっても，喜ばしいことだと思います。 ・ふれあい文庫ができたのは，岩田さんの「母の愛情」あってこそだと思った。

表５に示されるとおり，ふれあい文庫の作成した**点訳絵本について**の感想が多く述べられていた。自らのグループで作成した点訳絵本と比べ，熟達した技術や視覚障害者への配慮を持った作成への気づきが現れている。また，**ふれあい文庫の活動について**も多くの感想が述べられ，その活動内容への敬意が伺える。最も多く述べられた**岩田美津子さんについて**では，生き方についての憧れやその実行力に対する敬意など，福祉社会における理想的な人間像として岩田美津子さんを認識している様子が明らかとなった。専門職アイデンティティ構築が必要な学生においては，岩田美津子さんの存在およびふれあい文庫の活動がよき社会モデルとなっていることと考えられる。

⑤　「点訳絵本」展について

表６　「点訳絵本」展について

	アンケートの内容
展示された点訳絵本について	・みんなの点訳絵本が素晴らしかった。 ・（ふれあい文庫の）プロの技術を見て，（自分たちの作成した物に）落胆した。 ・他のグループがどんな風に作ったのか見ることもできたし，反省点等もう一回自分たちが作ったものについて見直すことができた。 ・製作グループの個性が出ていて，どれ一つとして同じものはないのですが，全てに共通しているのは，「視覚障害を持つ人のことを考えている」ことだと思います。 ・並べてみると，本当に多くの点訳絵本があり，驚きました。私たち学生がこんなに作ったんだと感じました。どの絵本も丁寧に作られていて，その絵本を手にした親子には，私たちの気持ちも伝わるのではないかなと思いました。

	アンケートの内容
展示された点訳絵本について	・他のグループはきれいなものが沢山あり，自分たちのものが恥ずかしくなった。 ・まだ，作成方法をしっかり守りきれていない点も気付かないうちに多々あったと思います。なので，点訳絵本に初めて触れる人，実際に点字を使って生活している方々が見るかもしれないと思うと少し恥ずかしく感じました。 ・199人の思いが込められていて，よい点訳絵本ができたと思う。
展示会について	・展示することで，さらに多くの人に周知して頂く良い機会となったと思います。 ・学内のポスター等により，図書館で開催していることをもっと広報するのも良いでしょう。 ・とても良かったと思います。やりがいがあり，みんなで協力できて嬉しかった。 ・他の学年にも多く見て欲しい。 ・（展示期間中に）学祭があるので，来場した方にも足を運んでもらいたいです。 ・沢山の工夫がされていて，楽しかった。 ・いろんな人が絵本を楽しめるようになって良かった。 ・達成感が溢れた。大学の人だけでなく，地域の人々にも広く，点訳絵本とふれあいを持っていただけるよいきっかけとなったと思う。 ・（大学内の）地域交流センターにも展示した方が良いと思う。 ・どのようなものか知ることができるのはいいが，過程についての説明がもう少しあっても良かったと思う。 ・もっと多くの人に見てもらえたらなと思います。 ・一度に展示する作品数を減らすだけでは，（スペースに）限界があるように感じます。 ・製作過程なども詳しく書かれていて，わかりやすかった。 ・リストの作成と配置を考えるのに苦心した。 ・今までも（図書館にて）いろいろな企画展があったけど，その中でもいいものだったと思います。 ・これからも継続してやるべきだと思う。
意識の広がり	・点訳絵本が視覚障害者の方だけの専用と思い込まないで，皆が点訳絵本に触って，その点字がユーモアな存在であって欲しい。 ・（点字の）福祉事業所に関わっている人たちと協同で点訳絵本を増やし，さらに普及したいと思った。 ・いろんな本屋さんに紹介して，展示してもらっても良いと思う。 ・さまざまな人たちが訪れるこの展示会は，健常者の人たちが，障害のある方たちのことをよく知れる機会だと思いました。 ・大学の図書館だけでなく，公の場でも公開してはどうだろうか。 ・私たちが行った活動が，地域や社会に知ってもらえてよかった。 ・もっと，この点訳絵本のことを広めて，点訳つき絵本が一般的になって欲しい。

表６に示されるとおり，**展示された点訳絵本について**の感想が多く述べられていた。他のグループの作成した点訳絵本と自らのグループが作成した点訳絵本を比べて反省点を見いだす姿や自他ともにそれぞれのグループに高い評価する姿，ふれあい文庫に対する敬意など，振り返りの姿と共に自他共に向けた視点が現れている。また，**展示会について**の感想が多く，地域や社会の多くの人への普及の意識の高まりや展示方法への創意工夫の提案や反省，さらなる活動意欲等が現れている。さらに，展示会を通して，その活動のみにとどまらず，**意識の広がり**も現れ，点訳絵本のさらなる普及を求める意見がその大半を占めていた。この項目のアンケート全体として，自分の活動・意識だけではなく，他者・地域・社会に向けられた視点が存在する。福祉専門職においては大切な視点の１つであり，この活動経験から育まれたことの大きさが現れている。

⑥　その他，活動全体についての感想

表７　その他，活動全体について

	アンケートの内容
作成過程について	・点字器がもう一個あればよかったと思います。 ・点字以外でも，その本の内容・良さを表現できることがわかった。 ・全員が（一人一冊）作ればよかったと思う。 ・点訳絵本一冊丸ごと作るのにとても時間がかかった。 ・途中，１人授業をやめてしまったので，１人分のやる所が増えて大変だった。 ・どのように点字を打つのかなどという疑問が自分の身をもって知れたのでよかった。 ・シートが足りなかったり，細いパーツを貼ったり作ったりが苦労した。
活動全般について	・先生の絵本に対する深い思いがあったからこそ，今回の活動へとつながっていったのだと感じました。ありがとうございました。 ・興味深く，有意義な活動でした。 ・授業の一環として行ったため，時間がないのはわかるが，もっと時間を取れると良かったです。後，点字だけではなく，点訳絵本の作り方についてももっと事前に講習があればよかったです。 ・大変だったが，作り甲斐のある作業だ。来年も続けて欲しい。 ・これからも，世界中にこの活動を広めていくべきだと思う。 ・点訳絵本を作るのは難しいけど，達成感がいい。 ・細かい作業だったが，こういった体験をさせてもらっていろいろ勉強になった。 ・一つのグループでやるのは大変だったけど，いい体験になった。 ・グループでやるには夏休みはなかなか時間が合わなかったので，大変でした。 ・至らぬ点はあったと思いますが，協力し，集中し，精一杯妥協せずに作ったつもりです。

	アンケートの内容
活動全般について	・根気のいる作業だったけど，楽しかった。 ・他の学生にも多くの良い影響になったと思います。 ・学科が異なるもの同士が同じことをやって，大きな作品を作ることの楽しさを知った。 ・みんなで「こうした方がいいんじゃない？」と言いながらできて，それぞれの考えがわかり，「なるほど！」と思うことが多くあった。
意識・行動の広がり	・ユニバーサルデザインの社会づくりと掛け声ばかりではなく，今回のような実践活動を通して，他者への思いやりを育むよい活動だと思います。 ・大学生活では，あまりみんなで協力して何かをするというのは少ないので，点訳絵本を通して，みんなで協力できて，本当によかったです。点訳絵本に興味を持つことができて良かったです。視野の世界が広がった気がしました。 ・今回は５人で作りましたが，今度一人でも作ってみたいなと思いました。 ・学生は他の授業より活き活きしていた。児童福祉論の記憶はこの絵本に集約される。 ・点字一つ一つ打つことで「その方々にどんな風に読んでくれるのだろう」と想像する。作り方が異なる普通の本よりも同じ絵本が点訳されているほうも次第に違和感を感じず，誰もがその絵本を開いてくれるだろう。いつか赤ちゃんにどちらの本に興味を持つのか反応を確かめたい。 ・点字に生まれて初めて触れ合ったけど，もっと知りたいと思った。 ・この点訳絵本作成で学んだことを今後活かしていきたい。 ・とても自分のためにもなったし，人のためにもなれました。 ・ちゃんと読んでくれる人の気持ちを考えなきゃと思った。だけど，こういう大切で素敵な活動だからこそ，強制でやらせてはいけないのではないかと思った。 ・この活動で視覚障害者の支援など考えることができた。 ・人（友達）との関係が深くなった。 ・この大学に入って，本当に意味のある活動ができ，幸せに感じます。 ・本屋に置いてないから市販のものも必要。または，今あるものは高い。 ・みなの頑張りが見えたり，この内容を考えることで，いろいろと刺激を受けることができました。 ・自分の福祉の視野が広がった。 ・点字を読める人はすごいと思った。 ・授業を聞いているだけでは，大学ではなかなか友達ができにくいと思います。グループワークのチャンスを作っていただき，仲間ができました。 ・初めて点訳絵本を作ると聞いた時，正直嫌だなという気持ちが大きかったです。けれど，やっているうちに本当に楽しくなってきて，「私こういうの好き」とまで思えるようになりました。普段，人に意見をなかなか言うことができない私が「ここはこうしたらいいんじゃない？」といえるようになりました。この点字体験は，私にとっては，とても大きな変化がありました。点訳絵本を作って本当に良かったです。終わった後に「ありがとう」と心の中で呟いている自分がいました。素敵な体験をありがとうございました。

表７に示されるとおり，その他，活動全般については，**作成過程，活動全般，その他意識・行動の広がり**等多くの感想が述べられている。このことから授業プログラム終了時における自らの意識・行動変化を実感している様子が伺える。また，この項目のアンケート全体として，「点訳絵本」展についての項目同様に，自分の活動・意識だけではなく，他者・地域・社会に向けられた視点が存在する。福祉専門職においては大切な視点の１つであり，この活動経験から育まれたことの大きさが現れている。

(2) 新聞・地方誌の取材から

授業プログラムに含まれる「点訳絵本」展開催期間内において，新聞４社，地域誌１社の計５社より関係者が取材を受け，情報掲載されていた。その取材を受けた学生の中で，以下のコメントを述べたものがあった。

「支援を受ける立場の私たちでも他の人を支援できると実感した」

（静岡新聞：2006年11月16日朝刊より）

この学生２名は，聴覚に障害を持つ学生であり，この点訳絵本作成によってこれまでの支援される側から支援する側の意識が芽生えたとしている。新聞の掲載内容には含まれなかったものの，この２名の学生はこの活動をきっかけとして「触手話」技術を身につけるために講習に通い始め，視覚・聴覚両面において障害を持つ人の支援に役立てたいという行動変化を取材の中で述べていた。このことからも，福祉専門職を目指す学生の意識・行動の変化が明らかとなっている。

VI 「点訳絵本研究会」の発足

授業プログラム終了後，一部の学生よりこの活動を継続させたいとの提案があった。このことにより，S大学附属図書館との連携し，学生を中心とした「点訳絵本研究会」を発足し，2007年８月よりその活動をスタートさせている。この研究会を発足するにあたっては，学生代表者がふれあい文庫と連絡を取り合い，今後協力体制を取りながら，地域の拠点として活動することとなった。これら一連の流れは，本プログラムを終えた学生自身の**“専門職人養成”のスタートとなる学生各自の専門職としてのIdentity（アイデンティティ：自己意識）を深めた意識・行動変化**であり，さらには，結果として導き出された「点訳絵本研究会」は，**“地域社会における機能の充実”へと発展する可能性**のある活動と考える。

Ⅶ　おわりに

アンケート結果及び本授業プログラム終了後の学生の姿から，学習目的であった①視覚障害者（福祉の対象者）への理解を深めること　②点訳絵本への知識を深めること　③点字の書き方を身につけること　④地域の中で障害を持つ養育者またはその子どものそれぞれにとってのより良い子育ち環境のあり方に理解を深めること　⑤専門職アイデンティティを育むことの５つに関して，意識・行動の変化があったことが伺える。特に，専門職アイデンティティを育むことについては，福祉専門職を目指す学生にとってはより重要な課題であり，プログラムの各活動内容から，「福祉領域における知識習得」「当事者の立場や福祉社会にとって必要なことへの興味・関心」「当事者と触れ合い，交流」「自他共に向けた振り返り」「他者・地域・社会に向けられた視点」等多く培った意識・行動の変化が明らかになった。点訳絵本研究会は，その結果，学生自身が生み出した場であると考える。今後，点訳研究会が，さらには地域社会の新しい機能として発展するならば，大学という高等教育機関において，文部科学省の求める「高度専門業人養成」への意識を育むのみならず「社会貢献機能」を産出していくものと考える。そういった動向の１つとして，大学内関係者のみならず地域において活動に興味・関心を持つ人々（地域の点訳ボランティア等）の参加も呼びかけ，より活動や人の広がることを目標としている。

今回取り組みを行った本授業プログラムは，アンケート結果から点字講習内容や点訳作成方法，タイムスケジュール，作成後の振り返り等多くの改善課題はあるため，より深い分析を行い，検討していきたい。また，今回の取り組みによって，この点訳絵本作成の活動のみならず，同様な専門職アイデンティティを深める授業プログラムの開発の必要性があると考える。講義や実習というカリキュラム上の内容のみならず，今後も授業プログラム開発に取り組んでいきたい。

※「点訳絵本」展開催にあたり，点訳絵本ふれあい文庫の皆様には点訳絵本の貸し出しなど，多大なご協力を頂きました。また，展示会開催準備には静岡福祉大学附属図書館担当の進藤令子係長ならびに図書委員の皆様にもご協力を頂き，より良い展示会が出来上がりました。ふれあい文庫代表の岩田美津子氏をはじめ，関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

注

１）藤縄理他　学生の専門職アイデンティティとコミュニケーション能力の分析　埼玉県立大学紀要第６号　2004.

２）仲本美央・進藤令子　ユニバーサルデザインを考える　～「大学教育」「図書館」「行政」との連携から生み出す～　埼玉純真女子短期大学紀要第22号　2006.

３）藤原里佐 「福祉教育」と「福祉専門職」 帯広大谷短期大学紀要第39号　2002.

参考文献及びUSL

１）岩田美津子「点訳絵本のつくり方」せせらぎ出版　2005.
２）文部科学省ホームページ http://www.mext.go.jp/
３）ふれあい文庫ホームページ http://homepage1.nifty.com/fbunko/

Development of a Class Program for Building a Professional Identity within Social Welfare

Mio NAKAMOTO

The purposes of this study were to develop a class program for building a professional identity within social welfare, and to report its effect on the students participating in the program. This program included making braille picture books for children. The process involves pasting into a book, plastic sheet imprinted with the text in braille and cut out in the out-lines of the illustrations. As a result, the class program promotes a sense of professional identity, and has an elect on the student's behavior.